心 理 学 科

学科長
大　島　　剛
OSHIMA Tsuyoshi

昨年の12月に本学創立50周年記念講演会として、国際教育研究センターおよび心理学科主催の第４回心理学フォーラムが開催された。要項は以下のとおりである。

創立50周年記念講演会・第４回心理学フォーラム
「震災と子どものこころ－阪神・淡路から東日本、そして熊本につなぐこと－」
日時：2016年12月11日（日）、13：30〜16：30
場所：神戸市総合児童センター（こべっこランド）
　　７階研修室
基調講演：本間博彰氏（前宮城県こども総合センター所長、児童精神科医・医学博士）
話題提供・コーディネーター：大島剛心理学科長
閉会挨拶：近藤要司副学長

2016年４月に熊本地方で震度７の大きな地震が発生し、多大な被害が出た。阪神・淡路大震災そして東日本大震災においても、子どもたちは大人と同じように被災し、心を傷つけながらも、それを乗り越えるべく頑張ってきた。しかし、その疲れや精神的負担が子どもたちの発達に影響を与えていく。このことを理解し、熊本地震で被災した子どもたち、そして今後起こるであろう震災に遭遇した子どもたちにどのような支援が必要かを考えていく講演会を企画した。

基調講演の本間博彰氏は、児童精神科医として宮城県中央児童相談所に勤務の後、宮城県子ども総合センター長として新たな子ども臨床に取り組み、東日本大震災発生直後から５年の間、チームを編成して精力的に宮城県内の子どもたちのこころのケアに携わり、また国内外に向けて震災時の子ども臨床の重要性を発信してきた。子ども総合センター退職後は福島県のクリニックで活躍している。

講演内容は、以下のようであった。

① 東日本大震災と子どもたちのダメージ
　災害は、社会的連帯を損ないかねない集団的なトラウマ（Collective Trauma）をもたらす。宮城県の犠牲者は死者9,541名、行方不明1,237名（内子どもの死者394名、行方不明36名）、遺児1,537名、孤児241名。

② 子どものこころのケアとして取り組んだこと
　子どもが心に受けた影響は見過ごされやすい。年齢の小さな子ども、発達に問題のある子どもは災害弱者である。心のケアチームのアウトリーチによる支援、子育て支援チームによる支援、学校定点観測的支援および東日本大震災中央子ども支援センターが発足された。

③ 子どものメンタルヘルス支援
　災害からの時間経過の中で子どものこころの問題も変化していく。災禍の中で何事もなかったかのように生きる子ども、目覚ましく発達する子ども（共感性、愛他性の高まり）、支援を受けやすい子ども（自分が必要とするテーマをわかっている）がいる反面、心の問題が遷延化・悪化する子ども（不登校・発達障害類似問題・暴力行為）、見えにくい問題が進行・悪化する子ども（無気力・引きこもり・閉塞感の強まり）、家庭環境の悪化に晒される子ども（虐待など）がいる。愛他性（困っている人を助けようとする人間の本能のひとつ、愛他的行為の結果としての協力という行為、互恵的愛他性）が重要である。そしてトラウマとはつながりを失うことであるので、ケアの基本はつながりをつけることも大切である。

講演の後に大島学科長が話題提供として、現地に行って聴取してきた熊本地震の現況と阪神・淡路大震災との比較を行った。阪神・淡路大震災と同様の時間経過による現況の変化、子どもたちの様子を報告した。また阪神・淡路大震災の時の体験から、震災を忘れたつもりでも身体が覚えてしまったために、人生の節目で震災の記憶が身体の症状として出てくる事例の紹介をし、熊本の地震でも被害状況に差があるためにでてくる不安や時間とともに予想される必要なケアなどの話題を提供した。

後半のディスカッションと質疑応答では、 愛他性や日本の国民性についてなどにも触れ、教育と福祉からの視点など、活発な意見が出た。この度の講演だけでは、語れないほどの現実があり、今なお震災は継続していることが話された。また震災時の子どものメンタルヘルスの支援には、児童福祉、精神科医療、教育の各分野の協力が不可欠で、非常時のそれぞれの分野の連携について課題もみえてきた。

参加者は31名と多くはなかったが、児童精神医学、心理学、教育、福祉など各分野で活躍されている方や 阪神・淡路大震災の経験した世代などさまざまな立場の方が講演に聞き入った。震災の記憶は風化しやすいが、阪神・淡路大震災の被災地である兵庫神戸がしっかりと語り継いでいく大切さが痛感された。